



開成学園排球部OB会

創部40周年記念文集

昭和62年11月

## はじめに

「創部四十周年記念文集」と題して、中村博次先生、小林先輩をはじめOBの方々、現役の小木曾君からいただいた寄稿文や思い出の写真、ならびにOB各位の近況報告をお届けします。ところで、最近のOB会の連絡では頻繁に「四十周年」と騒いでおりますが、昨年（一九八六年）、中村先生から「今年は四十周年だと思いが、どうするんだ？」と聞いていただくまで、それに気付かなかったというのが正直な話なのです。確かに、三十周年記念を帝国ホテルで盛大にやったのは昨年から十年前なのですが、古いOBの方々の中には、「いや、今年（一九八六年）がそうかもしれない」という御意見もあり、創部が本当はいつなのかはつきりしないのです。

その様な状況であり、しかも大きな社会から見れば小さな集団の出来事にすぎないのですが、それでもこれを機会に記念の文集を作ってみようと思いました。昨年は、創部当時に大変お世話になった上迫先生が御他界されま

した。また、小さな集団といっても我部が創立されてから約四十年の月日が過ぎさったことは事実であり、ここを巣立ったOBは約二百五十名を数えるまでになりました。さらには、昨年のOB総会以来、多くの方々に四十年の寄付金をいただきました。その様な訳で、あまり肩を張らずに、記念文集を作ってみました。広告やイラストなども考えたのですが、出来るだけ素朴な形にしました。もし百周年、二百周年と我部が続いてくれた時、昔はこんな文集もあったのかと、後輩諸君が読んでくれればいいと思います。

### 編集幹事

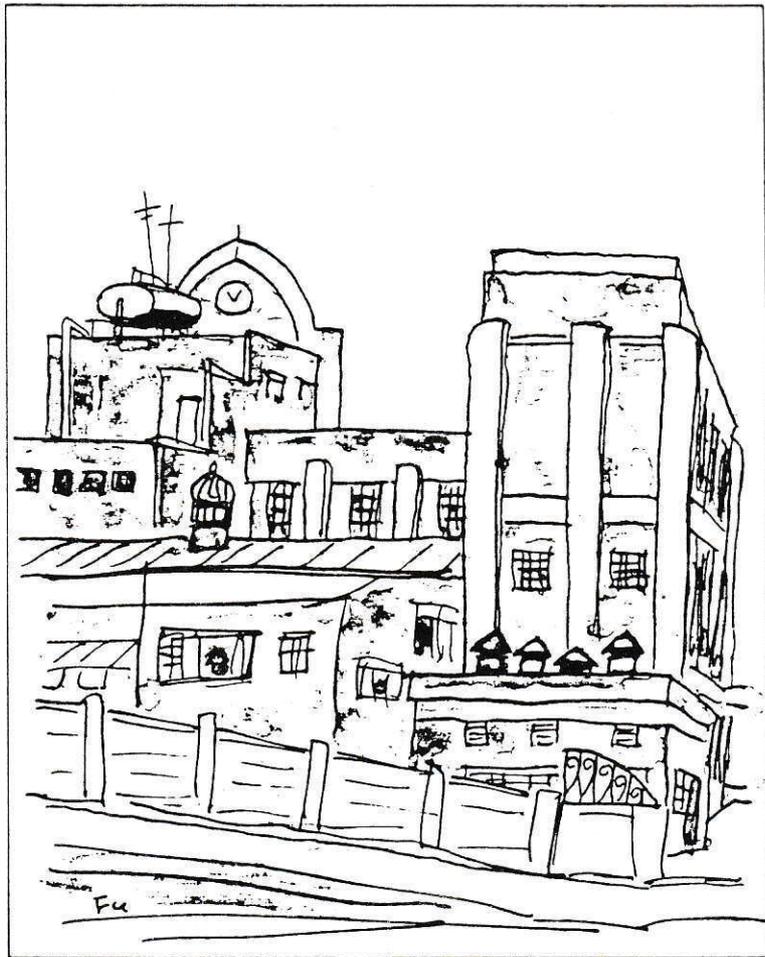
松原 秀彰（49年卒）

関 茂和（54年卒）

## 目次

### ◆創部四十周年記念寄稿文

- 中村 博次先生(顧問)……………「祝に一言」……………1
- 小林 正明(29年卒)……………5
- 野水 清(30年卒)……………7
- 明渡 久和(31年卒)……………「故上迫先生と私達」……………10
- 安井 高明(会長、37年卒)……………「私とコーラス」……………12
- 上田 一成(37年卒)……………「50才までに」……………14
- 玉田 恒久(38年卒)……………「色褪せた戦跡」……………16
- 清水 淳一(49年卒)……………「料理と光伝送」……………18
- 松原 秀彰(49年卒)……………「力まずにスパイク」……………21
- 松本 弘(59年卒)……………「千葉に来て」……………23
- 石賀 和義(59年卒)……………「米旅行で考えたこと」……………25
- 増田 修久(59年卒)……………「我々の夢」……………27
- 高橋 究(60年卒)……………「嗚呼スライディング」……………28
- 小木曾 和宏(現役主将、高2)……………30
- ◆近況報告……………32



(開成会会報 第48号より転載)

## 祝に一言

顧問 中村 博次

バレーボール部四十周年おめでとうございます。思えば昭和三十四年四月から故上迫先生の後任としてバレー部の顧問を引き継ぎ早や、二十数年あつというまでした。

当初開成ってなんと「キタナイ」校舎、設備のとのつていない学校と、小生も若かったのでこれなら大学の助手でそのまま研究室にいればなどと考えた。しかし私は現場で指導したいと云う思いが強く、今日に至っている次第です。「さあ……準備運動して練習に入れ」、平松（当時高三）三浦（キャプテン）、飯塚、ハチ（山本）と云うと……「ハア」と答えがかえって来て何も体を動かさそうとしない。どうしたんだね……つまり準備運動などと云うものは全くなかった訳である。

従って練習内容も全く順不同でした。また、コートはテニス（軟庭）と兼用「鎖とクイ打ち」のポール、今思うと随分開成も立派になったなアと長いことお世話になり嬉しく思う。しかし昔、設備のない方が部員の和、

心、しっかりしており強かった。高校五校リーグ（麻布、上野、開成、小石川、日比谷）が今日尚つづいている定期戦は素晴らしいものだ。

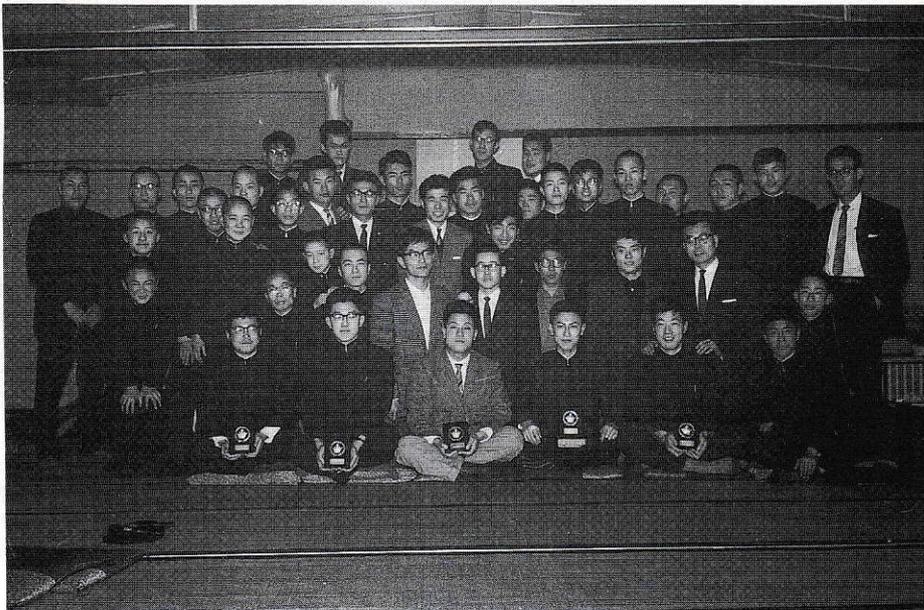
中学の定期戦もすばらしい。今日こそ岩井（千葉）で定例的に私設体育館を晴雨に拘わらず使用できるが、長野県の南神城（白馬）、畠をつぶしての特設コート、白馬おろしの冷たい水を頭につけつけ練習をした昔がなつかしく「想い出」を記憶している（写真の一部を参照）当時（昭35・36）、中一は西村隆君一名だったと思う。井上浩一君が（昭39卒）が中二で高校生の試合（練習）に唯一人出したこともあった。私学祭で優勝したこと、神奈川、水戸、熊谷の東京代表関東大会出場、現在の春の高校バレー全国大会の前年度公式新人戦で東京都ベスト4第三位は素晴らしい成績だ。当時のメンバーは桑田君を中心とする小川、山本、浜、竹内、佐藤智、長峰、小山……まだまだ沢山これに準ずる戦績は山積みのように残っている。結城、西野、富部、金森、鷯沢、田中、鹿江君、元気ですか、松原、井上（山崎）、柏女、老川、

石塚、安藤、杉山、市村：など熊谷での大会は残念でしたね。四十周年を機会に、これからの現役も第二の黄金時代を目指してほしい。バレーボールを通じて先輩・後輩の道がゆがむことなく、いつまでも存続することは、お互に大切にしたいものである。「頑張れバレー部」が「がんばれバレー部OB会」四十周年を機会に益々の発展を期待します。

思い出の写真①～④……  
中村博次先生より



①



②



③



④

開成排球部史上「最悪の」主将はオレかとかつて書いた。恐らくは「最低の」OBだとも思うが、これは恥の上塗になろうからあえて触れまい。となると、本稿は何も書きようがなくなる。まことに困ったことではある。そのわけは、こうだ。

むかし林さんという日本史の先生がおられた（一部のOBはご記憶だろう、あの「山賊」です！）。昨今は知らず当時は史上さまざまな事項の年代年号を暗記したもので、各種の記憶法があった。林氏はガリ版刷り手製年表にその記憶法——いわば語呂合わせを入れてくださったのだが、そのなかに八人に二色、公家と武家Vという項があった。『ヒトニフタイロ』は一二二一年すなわち承久の変である。いまや承久の変の何たるかも忘れたが八人に二色Vだけは頭にガンと入っていつかな忘れぬ。なぜか。この語呂合わせが「ヒトはおおむね二種類に分類しうる」という、いわば箴言と化してコトあるごに思い当たっているからだ。たとえば——。

商売がら、さまざまなジャンルのいろいろなタイプの人と接するが、学校時代のことをやたらに記憶していて懐しげに喋りまくる人と、まったくそういう話題に触れないし訊いてもおぼえていない人とがいるという、まぎれもない事実に気づいたのは、いつのことだったろう。

なぜそんな話を持ち出したかというところ、お察しのとおり、なにを隠そう小生はマサにこの後者に属する人種なのである。

開成時代六年間の記憶はごく少い。全部が全部「断片的」であり、しかもそのざつと九八%は不鮮明ですべてこれセピア色の霧の彼方というにひとしい。当然ながらバレー部に関わる部分も同様であって、ここに原稿として認めるべき何ものをも持ち合わせていないのだ。お恥しいかぎりというしかない！

とまあここまでが長大なる言いわけ。わずかに鮮明な記憶として残った二%のなかにあるのが、上迫忠夫先生のことなのである。

ひとつのシーンが甦る。一九五二（昭和二十七年）年七

月、日本が復帰したヘルシンキ・オリンピックで、上迫さんは戦後初のメダリストになられた。先生が帰国された後の某日、全校生徒が校庭に集合した。一言述べられるべく我がメダリストは（その昔「朝礼台」といった）壇に立たれた。ところが開口一番「栄冠涙ありというが……」と言ったきり、上迫さんはしばし絶句してしまわれたのだ。現在と違いワルぞろいの当時の「開成健児」どもがヤジったかどうか、再び口を開いた上迫さんが何を話されたかも記憶にないのだが、とにかくこの、万感胸に迫ったがためと思われる絶句と、虚空をニランでおられた表情だけは、今もあざやかに記憶に残っている。さらにつけ加えるなら、それは上迫さんの存在そのものだ。「鍛えられた肉体」に初めて接したという強烈な印象と申せよう。戦後の飢餓状態から脱していなかった当時のこと、『筋骨隆々』とか『強靱な肉体』とかの語は、少くとも私には言葉の上だけのものだった。それを上迫さんは目のあたりに、文字どおり「具現」して見せてくれた。体育の時間やバレー部の練習あるいは、当時

ほそぼそと始められた体操部の練習でのデモンストレーションでそれは展開された。私はただポーズと見とれるばかりだった。驚異的跳躍力、緊張と弛緩をくり返す全身の筋肉、これを要するに躍動する肉体の見本……。爾来「上迫忠夫」の名が私のなかに呼び起こすのは、先記の絶句シーンとこの「筋肉」に尽きるのだ。

亡父が晩年こんなことを言った。「人間てのは妙なもんだな。だんだん古いことを思い出してくる。この頃はツイ十年二十年前のことをドンドン忘れて、代りに子供時代のつまらぬことを思い出すようになったぜ」

このでんでいくと、私も古稀ぐらいまで生き長らえれば「懐しき開成時代」についての記憶が復活するか？改めて原稿を書かせてくれると売りこむようになるかもしれない。現役諸君、その時はよろしく――。

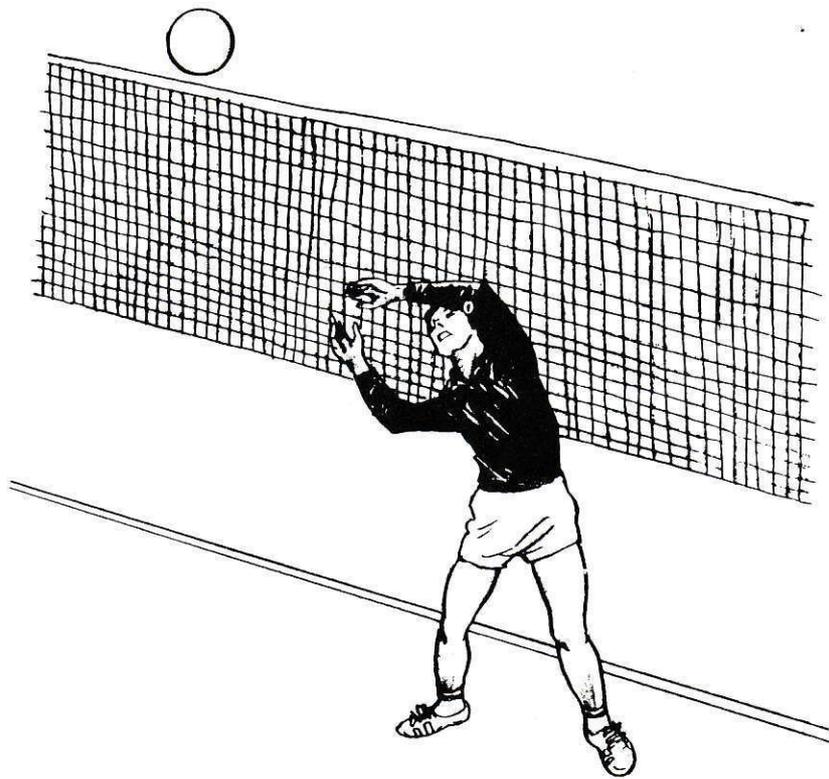
どこの路地裏にもベースボール——おおくは三角ベースであったが——に歓声を上げる子どもたちがいた。新しいスポーツはどれも関心を集め、小学校の体育の時間ではバレーボールに親しんだ。そして昭和二四年入学と同時に、兄が在籍していたこともあり、当然のように排球部に入部した。高校と中学とはまったく別に練習を行なっていたが、高校の夏期特別練習に中学生としてはじめて少数が参加した。一日、炎天下の練習を終え、体育館に戻り最後の体操をしているとき、意識を失った。冷たい、気持のよい濡れタオルが最初の感覚であった。不安げに眺める上級生の顔に急速に焦点が合った。覚えてるのは校庭を走っていたときまでであった。熱射病であった。

ボールが見えなくなるまでつづく練習はつい熱が入りすぎ、帰りはいつも駅の階段を真つすぐ降りることができないほど太腿が張った。後向きに歩いたものだった。そんなある日、田端駅への途中一匹の犬とすれちがった。

直後足に強い痛みを感じ、一目散に駆けた。ふくらはぎに鋭い歯型がついていた。たいへんだったのはその翌日から。狂犬病予防注射の副作用がうんぬんされているとさだまった。犯人ならぬ犯犬探しに、同行していた尾賀君（故人）とともに歩き廻った。いよいよ注射をしなくてはというとき、これにちがいないという飼犬が見つかり、さいわい予防注射済みであることがわかった。そのときは田端への道はグラウンドもまだできていず、焼け跡の余韻が残った暗い淋しい道であった。

現在のグラウンドの土地が購入されたが、体育の時間というと焼け跡のがらくた運びであった。掘り出される洋瓦や陶製の便器や色タイルに「渡辺町」という大正時代のモダンな文化村がしのばれた。野上弥生子、石井柏亭などが住んだこの町は、東京渡辺銀行（昭和二年倒産、金融恐慌のきっかけとなる。当時は別名）の系列会社（渡辺保全会社）が計画した。同一系列に東京電燈、東京瓦斯、東京乗合自動車などという会社をもっていたこともあり、かつて羽後佐竹家の下屋敷だったこの地にガ

ス、電気を完備し、電線はすべて地下という三〇〇戸あまりの近代的住宅街を設立した。町は夜も昼とわからぬ明るく広い街路に、赤い屋根の洋館がつらなりピアノの音がながれた。商店もござっぱりとして塗りたてのペンキのかおりをさせていた。住民は管理組合をつくり、夜警までし、環境を守ったという。大正五年にできたこの町も昭和二〇年四月一三日空襲で焼失した。興味のある方は野上弥生子の短篇『所有』を参照されたい。大生二〇年当時の様子が「W-I町」として克明に描かれている。整備されたグラウンドにはバレーコートもつくられ、一面だけの練習は終わり、高校中学の合同練習が日常的に行われた。



思い出の写真⑤, ⑥……野水 清 先輩(30年卒)より



⑤ 昭和 28年 3月



⑥ 昭和 28年 8月 神奈川県三浦郡での合宿

## 故上迫先生と私たち

31年卒 明渡 久和

故上迫先生と私の結び付きは、高一の一学期の体育の時間、授業内容がバレーボール、先生のあの小さな体格に考えられないすばらしいジャンプ力の見本を参考に、我々も一生懸命練習、期末テストで、ある程度出来る者が、先生の閻魔帖に○印で記入され十数人が勧誘された次第、当時バレー部の部員に高一は、加藤君一人で、高二は九名は居たのですが、必ずといってよい程全員揃わず、九人制ですからチームが組めず上級生が先生に頼んで勧誘したと後で聞かされました。

当時、先生は自分の体操の方が忙しく、又、体操部の二足のワラジの指導のため、バレー部のコーチは、我々が一通り練習が終わった時間、そろそろ道具を片付けようとしている時に、必ず体育館から出て来て、毎回暗くなるまで練習したものです。

高一の正月、横浜の先生宅へ年始に行き、そこでのもてなしは紙面には書けない様なすばらしい一時でした。

三十年、三十一年卒のチームは弱いチームでした。故に、チームワークは一層よくなったのではないかと思えます。ただ、卒業してから荒川区民大会は、何度も優勝し、区役所の役員からいやがられていました。OBになったら個人のプレーの旨味が出る様になったのです。現在でも、年に何回かは、急に集まっては会食し楽しい一時を過ごしています。

上迫先生のスタミナ源は、何処にあったのでしょうか。先生が還暦を迎え、お祝をかね進藤氏の山中湖寮に一泊した時、夜は酒を飲みながら十二時過ぎまで麻雀、翌朝六時に起床、八時から一日ゴルフ、帰路八王子で夕食（無論酒が先）、浅草に帰り飲み直し、各自別れたのが翌日の午前三時過ぎ、先生が帰宅したのは、四時ごろだと思えます。後日、その日のことを聞きましたら、六時起床、出勤、電車の座席が、暖かく、ついうとうと、気が付いたら品川駅、一時間目は自習になったと、丁度そのクラスに鎌田君の子息が居て全員に昨日の先生の行動が知れ生徒は大笑いだったそうです。又そのタフさに驚

いていた様です。

先生の名台詞『わしゃあ、おまえさん達と、飲む酒が、一番旨いんじゃ』の言葉を思い出します。加藤君が、秋田角館で開院中、角館の奇祭も、ご夫婦でご案内、田沢高原温泉では、入口が違って湯舟が、混浴で大笑い。

先生との、三十余年のお付き合いは、いつも楽しい雰囲気を作ってくれました。我々のグループは、今後も、酒を呑む機会を続けたいと思います。

最後に、小生昨年の四月末よりトレーニングルームに通い、週に三、四日柔軟体操、ジョッキングを行い、幸い体重が八キロ位少なくなり、スリムになりました。又ランニングも、ゆっくり走り、足、腰が、大部弱っていたのを、何とか、これ以上弱くならない様に努めている次第です。六十才になっても現在と同じでいたいたために練習しています。



## 「私とコーラス」

安井 高明

昭和61年11月の総会でOB会の会長に選ばれて早や一年たとうとしています。今迄の幹事の方達が培ってきたものを減らすことなく充実させ発展させることが最大の目標であります。幹事の方達の努力のおかげで、だんだんと充実してきました。

私が卒業した昭和37年頃、今体育館のある所に部屋があり、その前のグラウンドで放課後先輩達によくしぼられたものでした。今思えばなつかしいかぎりです。この5月には上野の精養軒で、同期の中浩正（逢坂剛）氏がカデイスの赤い星で直木賞を受賞したことも合わせて25周年の祝賀会を行いました。

私は一浪して日本大学理工学部建築学科に入学しました。どこの大学でも同じように各クラブの勧誘がさかんでした。たまたま高校の時のクラスメイト横山氏がおり、合唱団に入って唄っていたのです。考えられませんでした。彼にできるのなら、私もできるのではないかと、練

習に行ったのがコーラスをするきっかけでした。何事もちょっとした事が後々まで大きく尾をひくものです。それ以後やみつきになり現在迄続いています。

入団してみると、各学部から集まってきたおり、地方出身者が多く、女性の姿もありました。先輩はすぐこわくみえ、「4年間続くのかな」「学業の方はおろそかにならない方がいいな」と思ったりもしたが、今は故き栗本正先生（麻布学園で教鞭を執られました）の魅力にとりつかれながら4年間もあつというまにすぎて卒団しました。我々は18期の卒団であるために、「永遠の会」と名づけて仲よく死ぬまでつきあうことを決めました。

卒業と同時に不動産建設㈱に入社して大阪に配属になりました。大阪は初めてであり、まったく不案内でありました。学生時代に習った歌を唄いたいと思ひYMCAへ行ってみました。金曜日にコーラスの講座があったので、参加しました。週一回YMCAに行つて歌を唄い、帰りがけにホールで讚美歌を唄つて帰るのです。梅田迄歩いて仲間と飲むのが又楽しかったものです。何回かハイキ

ングの催しもあり、京都・嵐山等の思い出も忘れられませんでした。

東京に転勤になってからは、もっぱら聞く方にまわっていました。昭和58年5月頃台東区のポスターで「下町で第九」の募集があり参加しました。学生時代に独語を習ったとはいえ仲々声がだせませんでした。指導者松浦ゆかり先生の教え方にとりこになってしまいました。最初は何もわからず独語の暗譜から始まり、メロディを覚え発声するのです。練習を重ねるうちにどうやら口も動くようになりました。12月の暮に浅草公会堂で芸大の管弦楽研究部のオーケストラと我々台東区民合唱団二百名近い人数で唄い後った時は感無量でありました。その時の感激が忘れられず今も唄い続けています。

今日はいろいろな行事がありました。

2月22日 国技館で5000人の第九

3月8日 サントリーホールで第九

7月4日 都合唱祭

7月19日 サントリーホールで

知られざる名曲発表会

10月4日 人見記念講堂で

合唱コンクール でした。

12月21日 浅草公会堂で第九

12月27日 三越で第九

を唄いますので、

是非聞きに来て下さい。

以上

## 「50才までに」

37年卒 上田 一成

10月の日曜日、青く澄切った空に細い雲が山の頂上に向って何本も走っていた。K支店のスポーツ大会と芋煮会が行なわれる日だった。芋煮会というのは、この地方でよく行なわれる行事で、大きな鍋に里芋を中心に、肉、野菜、うどん等を入れ、味噌で煮て、皆んなで食べるというものである。ソフトボールの後、若い事務員と輪になってバレーボールをやった時、一人他の女の子と違って、上手な子が目立った。「A子君はバレーをやっていたの？」と聞くとニッコリ笑って「高校の頃ね」と返ってきた。よく見ると脚はスラッとしており太股から腰にかけて肉づきがよく、全体にバネを感じる身体をしている。「所長さんも少し出来るのね」と言われ、照れくさく「マァーね」と軽く返事をした。

数日後、支店へ行った帰りエレベーターでA子にバツタリ会い、食事に誘ったら「OK」との事で街へ出た。バレーボールの話を中心に会社の事、单身赴任の事等を

話題にして時間を過し、9時頃になったので車で送って行く事になった。自分の住んでいる市と同じ方向なので気軽に乗ってきた。車の中で「A子君と一度、浮気したいなあ」と言ったら「所長さんとならいいわ」と思ってもいない返事、「いいのか？」と声をうわずらせて念を押し、高速道路のインターの方向へ車を走らせた。モーターへ着くまで話題が途切れがちだった。3年ぶりの浮気だなあと思いつながら胸がドキドキして来る感じだった。白い建物に車を進め、気をつけながら車庫に入れ、足早にランプのついている部屋に入った。内部も白を基調とした室で壁はガラスばりにヨットの絵が書き入れてあり、明るすぎる感じである。A子の身体を軽く抱きしめ、耳の下に唇をあて、首すじにはわせて、アゴからA子の唇へとすすんでいった。A子の閉じた目をみながら甘い唾液を吸っていたが、「苦しいわ、お風呂にお湯を入れましょう」と身体を離し、テキパキと動き出した。風呂が一杯になるまで、コーヒーを飲み、ポルノビデオを見ていた。「所長さん、先に入って」とA子が言ったが「一

緒に入ろう」と誘う。「すぐ行くわ」と答え、トイレに消えた。

少し暗くした風呂場で赤いホーローの湯舟につかっている、タオルで前を隠し、腰を屈みかげんにA子が入って来た。湯桶で2杯、肩からお湯をかけ、後姿のまま前を軽くシャボンで洗い、ななめ前に恥ずかしそうに湯舟に身体を沈めた。「バストをよく見せて」と腕をとって、自分の方へ引き寄せて、肩から胸へ手をすべらせた。ピンク色の乳首が可愛らしく、自分の手でスッポリ隠れるぐらいのバストだった。乳首、バストと軽く手で愛撫をし、腰からお尻へと手を遊ばせていたが、「暑いわ」と顔を上気しながら立ち上がりタオルで身体の水気を取りドアに向かっていった。上半身に比べ、お尻が意外と大きいと思いつつ自分も湯舟を出た。バストオルを下半身に巻き、ぼんやりした明るさのベットの方へ行く。バストオルで身をつつみ、背中をむけているA子の脇に自分の身体を寄せ、手をA子の胸にやり、タオルを取ると同時にA子の身体をこちらに向けたとたん、電話のベル

が……

ハッとしたらいつもの自分の部屋で女房からの目覚しコールであった。

単身赴任になって6ヶ月、夢みtainな事があればと思っているが現実には厳しい。朝食、夕食、洗濯、そうじ、ゴミ出し、仕事と家事に追われ、ぼんやりテレビを見るのが息ぬきという生活である。身体も70キロを越え、車で行動するので歩かないし、月一回ぐらいのゴルフが運んでいる現状である。身体は太るし年令も40才を越え、単身赴任で自由に使える現金も制限され、若い女の子にもてる条件が全々ないこの頃である。50才になるまでいい事がないかなあと思いつつ、今朝も玄関のドアを開ける。

## 色褪せた戦跡

38年卒 玉田 恒久

開成学園排球部創部四十周年おめでとうございます。

これは、ひとえに諸先生方の御指導および先輩・後輩の連携による活動の賜物とお祝い申し上げます。本年は、自分にとっても小学校卒業三十年、サラリーマン勤続二十年にあたり、節目の年となっており、各々にイベントが生まれ、例年になく小忙しい日々を過ごしています。

我々が高校二年の時、ちょうど創部十五年であったわけですが、先輩方の人数も少なく年を数えるようなこともない若い時代のバレー部でした。中学三年時、中村先生が着任されてからというもの、「勝つためか、親睦と健康のための部活動か。」の論議がおこり、練習日を増やすの増やさないとさわぎながら、結局「やる以上は勝とう。」という結論になっていったような気がします。そのお陰で、高校二年時では、年間33試合も消化しており、第何期目かの『黄金時代』を形成したものと自負しています。

昭和三十六年度現役のゴールデンメンバーを紹介しま

すと、切れアジするどいキャプテン山本FR、軟体動物の坂本FC、運動神経ピカ一の安藤HC、馬力一番芥川HL、ポーカーフェイスの堤FC、長身利してのスパイク須田FL、いつもモテモテ武者BL、サーブ一本チビ玉田BC、このロール達を日向になって支えてくれたヤング井上、鈴木、宮崎、佐久間君達がいたわけです。

当時は、九人制で屋外コートが殆どであり、導入されつつあった六人制も屋外でやったものです。開成には、天井の高い体育館がなかったこともあって、たまに室内での大会があったりしますと、ライトと窓からの光に、ボールが見え隠れして、レシーブの調子が狂ったりしたものでした。

バレーボールを6年間やっていて、今、役に立っていると思われることは、生産管理という仕事柄、工場全体の運営を行っていく上で、組織や個々人のバランスとかチームワークを配慮しながらの展開がごく本能的にスムーズにできていることでしょうか。そして、得意だった

サーブが、40才から始めた硬式テニスにも大いに生かされ、遊び仲間の間でも、優越感を味わいながらプレーできていることでしょう。

縁が遠くなりがちな開成学園で、その母校を訪ねる唯一の機会となっていますのが排球部のOB会であり、麻布の仲間とも定期戦で、いつでも会える良き友人関係を維持できていることに感謝しています。

卒業当時、頂いた記念トロフィーとマスコットボールは、飾り棚に過去の栄光？の一つとして鎮座してませんが、そのボールに、あの33試合の戦績が、一度色を失った青インクの上に二重書きしたインクも、すっかり色褪せながら、時の経過に辛くも耐えて残っています。昭和三十六年度の成績などは、消えて然るべきものとは思いますが、この丁度よい機会に、四十年の歴史の一ページとして皆様に御紹介して筆をおきます。

△昭和36年度成績 21勝12敗▽

7 15					6 10	14					5 7	5 6	22	4 19	月日	
0 1 2	2 1 1	0 1 2	2 1 1	2 1 0	2 1 1	2 1 0	0 1 2	2 1 1	2 1 0	2 1 0	2 1 0	0 1 2	2 1 0	0 1 2	セット	
小石川	日比谷	聖橋	雪ヶ谷	江北	竹早	東邦	化工	海城	志村	成城	麻布	東邦	新宿	豊昭	聖橋	対線
同	五校リーグ	同	同	同	全日本予	(練習)	関東本	同	同	関東予	同	三校リーグ春	同	都大会予	(練習)	備考
12 3	23					17	10	11 5		24	10			9 3	7 16	
0 1 2	1 1 2	2 1 0	0 1 2	2 1 0	2 1 0	2 1 0	0 1 2	2 1 1	2 1 0	1 1 2	1 1 2	2 1 0	2 1 1	2 1 0	1 1 2	2 1 0
明治	日大 鶴ヶ丘	城北	聖橋	小石川	日大 豊山	岩倉	目黒	武蔵 ヶ丘	麻布	東邦	明大 中野	海城	北野	駒込	麻布	上野
新人本	私学祭本	同復活戦	同	同	新人予	私学祭予	同	六人制予	同	三校 リーグ秋	同	同	同	団体予	同	五校 リーグ

## 料理と光伝送

49年卒 清水 淳一

妙な題になってしまったが、特に意味はない。前者は結婚以来、趣味と化したもので、後者は現在の仕事「メシの種」である。

元来「料理」は嫌いではなく、きっかけは学生時代に母親が一年入院したため、妹と交替で夕飯をつくったことに始まる。この時料理をつくるのが苦にならない自分を発見し、秘かに「厨房制覇の日」を狙っていたのかもしれない。その後就職して二年余りアパートで待望の自炊生活をした。修業時代である。しかし、夜中に仕事から帰ってきて自分で料理をつくるという驚くべき、ある意味では寒気のおぼえる日々を送ったが、所詮男の一人暮らし、味わってくれる相手もいなくて、「鴨のオレンジソース煮プロヴァンス風」や「すずきの香草焼セピア風」をつくるわけにもいかず、訳の分からぬ料理をつくってはひとり悦に入っていた。こうした不遇の時代を経て、結婚。今度は味わうだけでなく、後片付けも

する人間がいる。薄給のため共働きをしている拙宅では、ひと月に二三度土曜の夕飯を小生がつくる。大体料理をつくる日は二三日前に宣言する。料理をつくる日は朝から落ち着かない。まずメニューの選択だ。この時間は遊び心が働く最も楽しい時だ。味、色どり等バリエを考慮して決めていく。得意は魚、野菜料理だ。メニューが決まれば材料の買出し。これは必ず自分で行く。自分でつくるからには、自分の眼で確めた材料でなければ納得しないし、買出しの最中にイキのいいネタが見つかってメニュー変更をする場合があるからだ。厨房には午後三時頃入る。メニューに応じて調理手段を決め、複数の料理をパラレルに進めていく。料理のマルチタスクだ。パラレル進行中一番困るのは、中間調理物（工場で言う仕掛品）の置き場所である。社宅の台所は狭く、いつも苦慮している。早く広い厨房のある家に住みたいものだ。調理時間は三―四時間かかるが急いでいるわけではないので気にしない。もちろんその間、においにつられた愚妻が、数度厨房への侵入を図るのを阻止することも忘れな

い。私は完成までは一切料理を見せないことにしている。愚妻があまりのおいしさに、眼を丸くして驚き、感激し、尊敬のまなざしで見つめることを期待しているからかもしれない。そうこうしているうちに、あちこちの鍋からいい香りがし始める。この時、調理前に自分で描いていた味、色になっているか否かが、運命の岐路だ。似ても似つかぬものができた時など、情けなくなつて鍋やフライパンを蹴とばしたくなるが、幸い才能があるのか、これまで失敗は一度だけである。あとは盛り付けに細心の工夫をし、出来上りだ。食卓に並んだ快心の料理と、妻の驚嘆のまなざしを目前にしてビールを飲むと、言い知れぬ満足感を覚える。思えば安上がりな気分転換だ。

読者諸兄で一度食したいと思われた方は、気軽に訪れて頂きたい。但し、拙宅ではオール予約制であるので注意されたい。また、原則としてメニューは「シェフのおまかせ」であることを言い添えておく。

「料理」に夢中になり、「光伝送」のスペースがなくなつてしまった。食べ過ぎは禁物ということか。



## 「力まずにスパイク」

49年卒 松原 秀彰

最近はOB会の運営を、これまでの不義理をとりもどすべく、お手伝いしています。ところで私も開成を卒業して今年で十四年になりました。卒業したばかりのOB諸君や現役諸君からみれば、大先輩の部類に入ってしまったようですが、仕事の面でも人生の上でも、まだまだ青二才というのが現実です。工学系の大学院を出て、未だ性懲りもなく大学に助手として残っていますが、もともと頭が切れる訳でもないのです。今、流行の「ハイテク」の波に溺れそうになりながら、毎日もがいています。それだけならいいのですが、最近、人間関係で、という大袈裟ですが、失敗をしてみました。十才ほど年下の学生に、私のやり方を反発されました。反発されたというよりも拒否されたといった方がよいかもしれません。

もともと私の性格は、バレーボールのスパイクと同じで、強引というか、一人よがり、押し付けがましいとい

うのか、同輩の連中や一、二年後輩の諸君はよく御存知の通りです。それでも、開成でバレーボールというチームプレーを体験し、またその後も大学での研究を通してチームプレーを磨いたつもりでした。しかし、これまで築いてきたつもりものが、はかなくも、またあっけなく壊れてしまいました。そんな訳でこのごろは孤独感にさいなまれる日々です、といつては、これまた大袈裟でしょう。一種のジェネレーション・ギャップだといつてくれる人もいますが、ともかく自分が、二十才そこそこの連中の間に溶け込むことが簡単ではなくなってしまうと感じました。かといって、彼らとうまくやれないことには、大学に限らずどんな職場でも仕事は進みませんし、また大学ではそもそも教育にならず、さらには自分が孤立するのは精神的によくないので、目下、自己反省も含めて対策を考え悩んでいます。

三十才を過ぎてそんな苦い経験をしてしまいました。少し前は私も年上の人に対して、拒否とは言わないまでも随分反発はしました。当時、どうして年上の人には若者

を型にはめて言い切れるのか疑問でした。例えば、「今の若い者は……」とか、「恵まれた時代に育つと……」などと言われると、それだけで反発してしまったのは私だけではないと思います。最近、誰が言い始めたのか、「新人類」などという言葉をよく耳にします。もちろん、私はそれに入れてもらえませんが、それでもあまり好きな言葉ではありません。どうして、そんな風に若者を決めつけられるのか疑問です。かといって今の私が、彼らをかばうつもりはありません。彼らはよく、「自分に素直に生きたい、自由にやりたい、何事にも束縛されたくない、……」と言いますが、そんなことは年齢を問わず誰しも願っている訳で、また年上の相手に対して、「考えが古い、個性が合わない、言い方がきつい……」と言ってしまうのは、どうしようもないと思うのですが。彼らにそう言われながらも、彼らとうまく付き合っていくためにはどうすればよいのでしょうか。そんなことは所詮無理なことだという人もいますでしょうが、私自身ではもう少し悩んでみようと思っています。

しかし、あまり悩んでも仕方ないので、暇を見つけて開成の体育館に行って現役諸君の練習に加えてもらったり、OBチームの若い連中と一緒に試合をさせてもらおうと思っています。体力がいつまで持つか少々不安ですが、彼らとのチームプレーで汗を流しながら、「力まずにスパイク」したいというのが今の心境です。「昔からそうだったらよかったのに」というのは、誰の声でしょうか？

## 千葉に来て

59年卒 松本 弘

私が千葉大の医学部に進路を決めたのは、高三の夏のことでした。当時、将来に対する明確な目標もなく、何の気なしに中高の六年間を過ごしてしまった私には、大学を選ぶこと、ましてや学部を選んで受験することなどできませんでした。我が六組は理系クラスだったので、友人たちはたいいてい、東大の理Ⅰか理Ⅱを目標にしていました。理Ⅰ、理Ⅱは受験の時点で学科を選択する必要がありますが、進振りによって三年に上がるときに専攻が分かれると聞いていました。私にとって、今すぐ自分の専攻を決定しなくてもいいということは大きな魅力でした。でも、開成―東大という進路に何かちょっと抵抗を感じたこと、東大を受けるには数学が苦手だったこと、そして、今あいまいさを残しても、また大学で同じことを繰り返すような気が強くしたこと、これらのことがいろいろ影響した結果、夏休みいっぱいかかって、家からも近い千葉の医学部に決めました。

千葉に来て、最初が変わったことは何と言っても、自由な時間がたくさんできたことでした。通学時間は開成時代の半分以下ですし、講義も空きコマが多い上に休講も多く、つまらない講義は自主休講。こうしてできた時間のほとんどをサークル活動に当てていました。私が二年間を過ごした「寒川セツルメント」には、いろいろな学部からいろいろな人たちが集まってきていました。子供会活動が中心だったので、教育学部の人が多かったのですが、他に文学部、工学部、法経学部、理学部。土曜の午後に子供たちのところに行って遊ぶということが第一の活動で、私も毎週土曜の午後を子供たちと共に過ごしました。昔から子供が好きで将来は小児科になろうと思っていたため「セツル」に入ったのですが、「セツル」の対象は子供だけではありませんでした。その地域に住んでいる人たち全体の幸せ、子供たちを含めた人々のつながりというようなものを考えていて、週に数回のミーティングでいろいろなことを話しました。子供会の運営などにも協力していたため、役員のお母さん方とよく話





ヨンの多い日本語では可能だが、文化の輸出の点では、おそまつなのが現状だ。国際社会の日本人はこの点をどうすべきなのか。

アメリカで中高を過ごす日本学生に会った。彼らには、二人称はYOUしかなく、それは君・貴方・おまえなどの言葉の含みをおとしたものであった。つまり、彼から感じるのは日本文化と多民族で形成される米語文化は相反するものではないか。だから、国際人となることは日本人でなくなることにならないかという問題が起こる。

この相反性をふまえた上で、これからの日本のあり方を考えると、まず各国のオピニオンリーダーに日本文化を輸出することすなわちPRが第一に必要である。次に、英語を言葉として教育することに力を入れ、さらに、英語と日本語の良い方をケースバイケースでとり出せる文化体系をつくり、英語をそのままの形で取り入れられる基盤を作った上で、複眼的な見方ができるようにすることが必要である。そして、これからの国際関係では、文明に立脚して国際的地位が与えられるのでそれなりの自

負を国民全体で作ることが必要だ。攻撃的な輸出に限界が来ている以上、各国調整等でさらに納得のいく関係を作りながら技術を輸出する形に徐々に移動して行くだろう。

こうなった時も日本は日本語というマイノリティのためメジャーになることはないが、規範たるものに成り得るのではないか。

それにしても、観光ルートでは日本人があふれ、コニアイランド等の外国人の観光ルートでありながら日本人のルートでない地を訪れて、日本人が一人もいないのを見ると、日本人のアンバランスさえ感じる。

## 我々の夢

59年卒 増田 修久

私は59年に夏合宿の高校チーフを引き受けて以来、3年間高校のコーチとして現役を見て来ました。OBの方々の中には、私がせっかく大学生になったのに、どうしてわざわざ高校生や中学生（現在は中学を見ています）の面倒などを見るのかと疑問に思う方も多いのではないかと思います。そこで自分なりにその理由を考えてみたところ、二つの答を思いつきました。

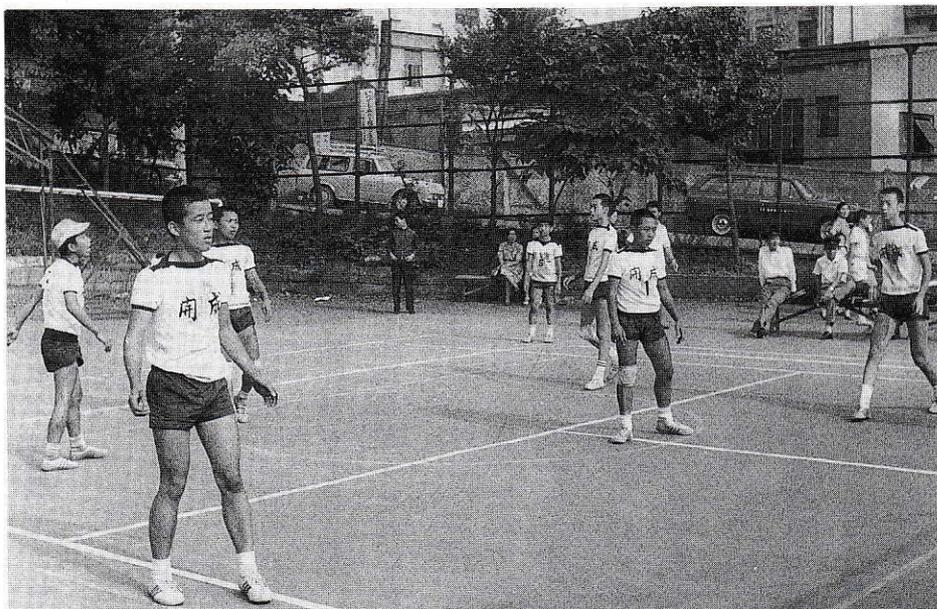
一つは、現役たちのバレーに対するひたむきさに私の方が奮い立たされ、やらずにはいられなかったということです。彼らなくしてコーチとしての私は存在し得なかったと思っています。そしてもう一つは、「勝つことが夢だから」というただそれだけのことです。現役時代、5年間バレーだけにすべてを賭けながら、レギュラーになれなかったあの悔しさは、今も忘れようがありません。もし私がレギュラーとして活躍し、よい戦績を納め、満

足のいく現役時代を過ごしていたのなら、こうして卒業してもなお、勝利を追い続けるようなことは、なかったかも知れません。

ベスト16は当然、年によつてはベスト4やベスト8といった時代に比べたら、今のバレー部など情けないものですし、昔の厳しい練習に比べれば、今の練習など遊びのようなものかも知れません。しかし技術や練習法は変わっても、バレーを愛する心、勝負に対する闘志は、変わらないと私は信じます。

四回戦ともなれば、相手はバレーで選手を集めているような学校です。我々は開成の生徒として、学業の上でもそれなりのものを要求されていますし、その上でバレーでも勝つというのは並大抵のことではありません。しかし勝つことに対する愛と情熱を、伝統として受け継いでゆけば、いつか必ず勝てる日が来ると信じています。OBになっても、みなが母校の勝利を願いつけるようなバレー部、OB会であってほしいと思います。

思い出の写真⑦, ⑧…… 矢澤俊彦先輩(48年卒)より  
昭和44年学園祭にて



⑦



⑧

## 嗚呼 スライディング

60年卒 高橋 究

あなたはスライディングできますか？

さすがにOBになった時に、スライディングが出来ないのはなんとも情けないと思った私は、その昔、某先輩に「あのゾウみたいな奴」と形容された体を、コートに投げ出すようになった。高一の頃だったと思うが、言うまでもなく私はそれまで膝でしかボールをとれなかったのである。

わたしはスライディングしたい!!

あれは合宿での事だった。石井君と風呂で一緒になったとき、ふと見ると彼の腰骨の両側が、内出血でドス黒くなっているのを見つけた。「おまえ、それ、何?」「スライディングでやったのさ、このぐらいやらなきや、だみだね。」あの石井スマイルでこう言われ、私は猛然?と床に飛び込むようになった。

だけどスライディングはこわい!!

とは言うものの、私は中々彼の様に華麗に滑ることができず、アゴを切っただけで腰のアザどころの騒ぎではなかった。実際アゴなどを切ってしまうのは、明らかに胸で滑っていない証拠なのであるが、本人は滑っている心算になっていたのである。

スライディングうまくなりたい!!

おそらくあの井野体育館で流した血の量にかけては、私は他の誰にもひけをとらないであろう。そんなものを自慢する奴はどこかおかしいという話も無くはないが、鼻血からはじまって、腕、膝、指、そしてアゴの傷と、およそ血という血をあそこで流したのは私しかいないのではないだろうか。毒舌で有名な白子君は、今度は献血でもしろと言いついに違いない。

狂気、凶器のスライディング!!

傷口の上にまたケガをしてしまい、それが繰り返され

たために、私のアゴには一筋の傷が残るようになってしまった。結局現役を引退するまで、アゴのケガは治らなかつたのである。

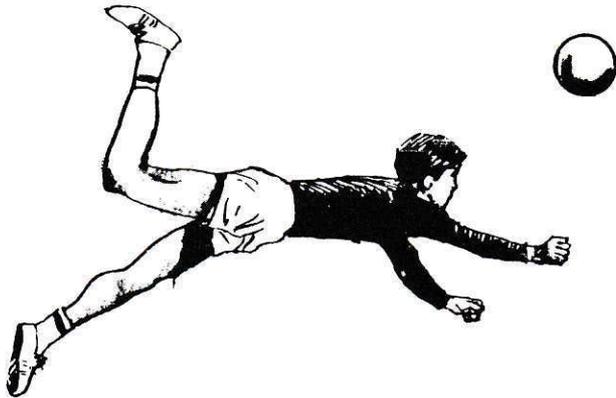
嗚呼、無情のスライディング!!

小学生の頃、『アーム・ジョー』とはいつたいどんなSFだろうと思っていたが、図書館に行つて、『ああ無情』というタイトルを見つけた時、私はしばらく立ちつくしてしまった。というのは冗談だが、中々できずに床をのたうち回っていた私が、感覚的に「おっ、できた!!」と感じたのは、皮肉にも現役最後の練習であつた。それからというもの、私はめきめきと上達し、バレーボールを本当に楽しむようになったのである。「きわむはOBになつてからうまくなつた。現役の時にそれだけの動きが欲しかった。」とはまたもや開成会の試合での白子君の言である。うるさいんだよバーロー。

ともかくにも、こうしてようやく私は滑ることができるとなつたのであるが、顎に一生残ることになる

う傷は、今では私にとって、六年間バレーボールを続けたことを示す何よりの勲章なのである。

あなたはスライディングできますか？



OB会の会報にのせる原稿を書くようにと言われて、文集を書くのが大の苦手の私は、「さて困った。」と思うと同時に「こんな時期にどうして？それにOBでもないのに。」と正直なところ思った。たのまれて素直に了解したものの、OB会の会報というものをバレー部に在籍して5年目になる今までに一度か二度しかお目にかかっていないので、あまり進んで書く気になれなかった。が、OB会は必要なものだし、その情報の伝達方法として、会報が存在するのも当然だから、と考え直してひたすら書いている所なのですが部員全員に寄稿をよびかけてみたものの、今のところ書いた者がいる様子はない。この調子だと強制的に書かせることになるのだろうか、それならいっそ全部自分で書いてしまおうか、など考えていますが、最終的に私のこの文と他にいくつかが載っただけだとしたら、その理由は全て私の怠慢によるものと言っていていいでしょう。とこのように文章の下手な私はこんなことしか書けません。この会報を読んで、私の文

章に目を通して下さる方がいらっしやれば有難いのですが……。OBの方が読むとなるとめったなことは書けないなあ。と思いつつも、「何でも好きな事を書いていいよ。」と言われて小学校の時の作文の時間を思い出してますます頭をかかえてしまって、当たりさわりのないことを書いておこうと思ったはずが、初めからグチのようなものを書き出す始末。おまけに文章は出たらめで敬語もろくに使えず字まできたないときている。これを読むOBの方のしかめつづらが目に浮ぶよう……。有難いどころの話じゃない、自分でこれを会報に載せていいものか不安になってきた。もっと真面目な事を書けばよかった。というわけで、「現在のOBと現役の関係」と題して真面目なことも書きましょう。

春・夏の合宿、卒業生の送別会、麻布との定期戦、それと普段の練習。OBと現役とが直接接する機会はこのなかめでしょう。そしてその時に直接会うOBの人数は多く見積って一年間に50人余でしょう。その内大学生の方は30人を超えているでしょう。大学生の方は年が近い

こともあって私が現役の頃から知っている人ばかりです。しかし、今の中で大学生のOBの方の中で何人顔と名前が一致するでしょう。またその逆もです。社会人の方の場合、合宿などで私も顔と名前が一致しないこともあります。年も離れていますが、それはある程度仕方がないでしょう。年も離れているし、会っても話はしづらいものですから。でも、大学生の方の場合、練習を一度や二度見に来ただけで覚えられてしまうものです。練習を見に来れなくても、合宿に来て、食事やミーティングの時やその後に少しでも話をすれば、「あの先輩何て名前なんだろう。」とその後でこうなるものです。それなのに今の中一は合宿のチーフといつも練習に来る先輩しか知らないでしょう。一年間に30人の大学生のOBに会うのには、OBの方ももっと現役に身近に接して下さい。合宿でほんの20分でも話をすれば、必ず覚えられてしまうでしょう。それが二晩続けば忘れないでしょう。そうしてOBの名前を知れば、中学生もあれほどOBを恐れないですむことでしょう。この文集が出るころには私はもしかしたら引退し

ているかもしれません。そうすればもうこのように現役の立場で何か言うこともないでしょう。今まで書いたことはOBになる前の悪あがきだと思って読んで下さい。失礼しました。

PS OB会から何か（現時点では垂れ幕の予定）をい

ただけるようです。有効に利用しようと思います。どうもありがとうございました。



◆近況報告……………

昭和六十二年八月の住所調査の御返事から

大滝 利尚 (25卒)

久し振りにアルバムを整理していたら懐かしい写真が出て来た。25年6月ユニフォーム新調記念(？)、岩谷先生を中心に野水、吉村、塚田、近藤君達の雄姿。別の一葉は小生と出野先輩がスリムなスタイルで：躍動感いっぱい！

吉村 功 (26卒)

御無沙汰致しており申訳なく思っております。海外出張が多く一年の30%は東南アジアに出掛けております。赤道直下で見る南十字星はなんとも言えないロマンチックなものです。特に一人旅は良いものです。

野水 善三 (26卒)

開成排球部に飛び込んでから40年も経ったのかと驚愕

しています。ルールも変わり体型も変わり、バレーボールをやったことがあることは、誰も信じて呉れません。益々の発展を祈ります。

宗近 伸匡 (30卒)

6月に名クイッカー岡部雅臣先輩(27年卒、山種証券ロンドン社長)にロンドンのシティで再会できました。休日には郊外の名所旧跡をロールスロイスで御案内いただき、白夜のレストランでは20年代のバレエ部が活躍していたことなど、一杯やりながら話に花が大いに咲いたものでした。

明渡 久和 (31卒)

暑い毎日が続きますが昨年の4月以来トレーニングジムへ週3、4回通い、今では体重が8キロ減らし、又、月一回位ハイキングに出掛けている毎日です。

小田木 毅 (36卒)

すっかり開成バレー部とはご無沙汰いたしておりますが、弁護士業務に忙殺されております。健康のためには毎日曜日に水泳をしておりますが、水を切って進む頭頂部はすっかりはげあがってまいりました。

山本 純一 (38卒)

近頃、地上げ屋さんや飲む機会がありました。苦勞話には面白いものがあります。相手を説得するには相当地な根気が必要です。人間的魅力も一味違ってきます。ただいま土地問題に注目。

大木 豊 (36卒)

昭和50年4月より、現住所に医院を開業し、地域医療のために努力しています。

芥川 修 (38卒)

持病の腰痛悪化の為、一年間第一線を退き治療した結果、昨年現場復帰し一年間を無事経過する事ができました。爆弾は抱えているものの幸い快方に向っており、3年ぶりにゴルフも出来る様になっております。

最近運動不足のため、肥満傾向にあり悩んでいます。中村先生をはじめ、OB会員の皆様、体だけは、十分気をつけて下さい。

上田 一成 (37卒)

自然の豊かな土地で单身生活を真面目に過しております。開成同級生が時々ゴルフをやりに来ておりつき合つて参加しております。あと2年ぐらい当地に居そうです。

麻布OB戦欠席、失礼致しました。

玉田 恒久 (38卒)

車を使うことが多く、どうしても運動不足がちです。顔を合わす日曜のみですが、子供相手に野球、テニス、バドミントンで体力の限界？に挑戦している此の頃です。

菊地 正直 (39卒)

最近、腹の具合が気になり始めました。同期の諸君はいかがでしょう。たまには一緒にバレエをやって、飲みたいと思います。開成のバレエ部のため、幹事の皆様これからもがんばって下さい。

宮崎 直樹 (39卒)

諸先輩方をはじめとして多くの方から多額の年会費、寄付金の振り込みをいただき、どうもありがとうございます。これを預る者として責任を感じます。ソーラーシステムの仕事で結構忙しい思いをしています。

鈴木 康之 (39卒)

今年結婚以来6度目の転居。子供達も中1・6年・3年となりました。特に6年の長男は身長163cmと父親を急追しております。今年ぜひ皆様とお会いしたいのですが、中村先生に宜しくお伝え下さい。

沢井 博之 (39卒)

パブレストランークリフォード・クラブを開店してもうすぐ5年になります。7月11日には二五〇名のお客様を迎えてジャズコンサートを開きました。先月はじめに開成会ゴルフコンペに初めて参加しました。

佐藤 勇 (40卒)

9日間の夏休みを、3人の子供と女房相手に目いっぱい遊びまわりました。山に登っては足腰の衰えを感じ、遊園地では子供のタフさに辟易。気力と口だけはまだまだ健在ですが……。

片野 昭秀 (43卒)

幹事長という大役を仰せつかりましたが、公務多忙となり、すっかり仕事をさぼってしまい、松原、関、両君におんぶにだっこの現状で、たいへん心苦しく思っています。審判では、中村先生のバックアップをいただきます。国内では最上級のA級の資格試験を受けてきました。

小川 宗男 (45卒)

あいかわらず、毎朝のジョギングを続けています。今秋か来春には二度目のフルマラソンに挑戦します。バレーボールも近くの体育館や小学校のママさんバレーにまじってたまにやっています。

柏女 靈峰 (46卒)

ごぶさたばかりで申し訳ありません。昨年4月から厚生省児童家庭局に勤務しています。通称「霞ヶ関残業村」「霞ヶ関母子家庭」で我が家の3人の児童も家庭も福祉に欠ける状態(?)です。バレーボールは昨年3月まで職場で低いネットで楽しくやっていました。

関口 昌彦 (47卒)

62年1月より二年間の予定で経済企画庁経済研究所に出向しております。現在は一橋大学の高山憲之助教授の企画庁での研究プロジェクトのお手伝いしております。

勝田 広夫 (47卒)

本年一月より豪州シドニーにて勤務中です。バレー部の会合にはすっかり御無沙汰しておりますが、帰国後はまた参加させていただきたく思っております。中村先生はじめ現役諸兄、OBの皆様のご活躍を祈っております。

山本 雅司 (48卒)

7月は私事で大変忙しい月でした。(7/1に引越、7/13に長男誕生) 今後ともよろしくお願い致します。

矢沢 俊彦 (48卒)

何とか元気にやって居ります。6月1日に男児誕生、亮彦と命名。こいつも元気で親に似たのか夜になると益々大きな声で泣き、本領を発揮します。寝不足に敗けぬ様、耐え忍び、夏バテにならぬ様頑張ります。

石塚 伸一 (49卒)

本年10月1日より、北九州大学法学部に赴任することになりました。親子4人初めて東京を離れるわけですが、狭い日本のこと、小倉にお出かけの際は是非御連絡下さい。

清水 淳一 (49卒)

結婚して半年余り過ぎて、すっかり新生活に慣れたところ。仕事の方は相も変わらず光伝送で、最近デジタル・オーディオ(CDやDAT)にも使われ始めています。

加藤 雅之 (49卒)

昨年の会合以来御無沙汰致しておりますが元気でやっていますか？ 私は入社七年目を迎え、研究というよりも管理業務が多くなってきており、あわただしい毎日を送っています。

中山 一 (49卒)

4月にオープンした慈恵医大柏病院に派遣されて、毎日千代田線に御世話になっています。時々開成の生徒にあいなつかしい気がします。

柏女 浄照 (49卒)

長男も一歳四ヶ月になり、いたずら盛りです。仕事と子供の相手に頑張っています。バレーも一応まだ現役でやっていますので、時々OBの試合にも出させていただければと思っています。

杉山 伸郎 (50卒)

最近社内でバレーボールをやりましたところ、一日おいて肩は痛い腕は痛いので大変な身体になりました。日頃身体を鍛えているとはいえ、バレーボールは非常にハードなスポーツだとつくづく感じました。

竹内 央尚 (50卒)  
4年間の札幌勤務の後、今年4月より本社公務部にて  
防衛庁および警察関係の営業を担当することになりました。  
またよろしくお願い致します。

橋本 和弥 (53卒)

自動車電話の開発業務に携わっていますが、私の愛車  
には未だ……。 「紺屋の白袴」に代わる新しいことわざ、  
「自動車電話エンジニアの電話なし車!」この秋から一  
年間英国で勉強してくる予定です。

野口 恭司 (53卒)

建設業バレーボールリーグで頑張っています。また、  
墨田区のリーグ戦では49年卒の青木さんによく会います。  
みんなバレーボールしていますか？

鏑木 孝明 (53卒)

仕事では情報処理に、趣味では音楽にどっぷりつかっ

た毎日です。人事データバンクの再構築がメインの仕事、  
来年4月には自分の台本によるオペラを上演する予定で  
す。多忙にて独り者です。

吉田 哲矢 (53卒)

毎日、仕事が忙しいようで、家には、めったに帰って  
来ません。(母)

熊谷 達範 (54卒)

人事異動で荒川5中から葛西3中へかわりましたが、  
今度の学校も男子バレー部員6名でさびれた部活動です。  
やはり、部活は部員がたくさんいて、きびしい雰囲気  
あってほしいものです。

井手本 康 (54卒)

4月29日に結婚しました。二次会では、同期の諸氏に  
大変お世話になり感謝しております。静岡に移って、ま  
もなく一年半になりますが、温暖で良いところです。東

京まで遠く、なかなか会合に出れないのが残念です。お近くにお寄りの際は、どうぞ。

高橋 琢二 (58卒)

今秋、結婚することになりました。

佐藤 徹 (55卒)

早いもので、開成を卒業してから丸四年、大学も卒業してしまいました。もともと、大学院に進学したため、あいかわらず学生をしておりますが。現在、六本木にある東大生産技術研究所という所にいます。

古口 健二 (55卒)

清水 誠一 (59卒)

人事部長が言った。鳥取へ行け。来た。帰りたくなつた。人がいない。文化がない。遊びがない。情ない。二度目の夏、久々に上京した。帰りたくなつた。すつかり鳥取県人になっていた。

今年は就職活動のため、「夏休み」と言えるものはほとんどありません。暑い中、慣れぬスーツを着てOB訪問をする毎日が続き、社会に出ることの厳しさを思い知らされています。

栗村 元 (56卒)

松本 弘 (59卒)

今年、三菱化成に入社致しまして、北九州市にある黒崎工場で分析の仕事をしております。当工場では九人制バレーボールが盛んです。

医学部バレー部の練習、看護学校のバレー部のコーチ、自治会の仕事、バイトと相変わらず忙しい毎日を送っています。父の転勤のため両親は福岡へ、兄も就職で山口に行ってしまう、一人気ままな寮生活です。

石賀 和義 (59卒)

七月中旬から一ヶ月間、訪米して参りました。初めて海外に出るため、不安もありましたが、一応自分でよしと思う旅行ができました。この体験を生かすべく頑張つて行きたいと思っています。

増田 修久 (59卒)

4年後の関東大会を目指して、中2を英才教育中です。気の長い話ですが楽しみにしていってください。来春は新大学生が一気にふえるはずなので、開成クラブもパワーアップします。今後ともよろしく願います。

白子 智義 (60卒)

現在東京大学教養学部文科I類2年在学中です。大学ではバレーボールはやっておりませんが、合宿やOB戦にはできるだけ参加したいと思っております。

藤田 佳秀 (60卒)

別に遊び呆けているわけではありませんが、大学というのは面白い所だ、と最近思えるようになりました。OBチーム主将(連絡係?)を仰せつかっており、荒川区連盟一部昇格が悲願です。

高橋 究 (60卒)

大学という所はまったく暇な所なので、わざと自分を忙しくさせて毎日ヒーヒー言わせながら暮らしています。そのおかげで12kgもやせてしまい、背中に哀愁が漂うようになったなあと思う今日この頃です。

松崎 弘志 (61卒)

筑波大の医学バレー部で相変わらずバレーボールをやっております。夏休みも大会その他で忙しく、高校の合宿もサボりがちになっていのですが、なつかしい面々にも会いたいのので、顔を出したいと思っています。

神ノ田 昌博 (61卒)

大変忙しい毎日ですが、なかなか充実した大学生活を送っています。

石森 明 (61卒)

今春、東京医科歯科大学に入学し、引き続き、大学でバレーボールをやっております。

常深 泰司 (62卒)

毎日暑い日が続いていますが、バレーボール部で培った体力と精神力でこの夏を乗り切ろうと頑張っています (私は只今浪人中です。)

松山 晃 (62卒)

駿台予備学校に通う毎日が続いておりますが、高校時代の延長のような生活を送っています。運動をしないものですから、体重が加速的に増え、来年の春には動けなくなっているかも知れません。

浜 和男 (45卒)

勤務先は三菱商事海外建設部。但し仕事の質に変化有り。海外進出企業に対するコンサルティング業務を提供中。バレーボールとは無縁の生活。テレビ観戦のみ。家庭は妻、長男8才、次男5才と極めて健全家庭。

開成学園排球部OB会
創部四十周年記念文集
発行 昭和六十二年十一月
発行者 開成学園排球部OB会
定価 非売品 (会員頒布)
編集 松原 秀彰 (49卒)
印刷 関 茂和 (54卒)
(株) タカマス
(株) ケイナン